

誰一人取り残さない

安来市立伯太中学校 三年 梅瀬真心

多様性はSDGsの軸となる重要な概念であり、SDGsを達成するためには、多様性の実現が必要不可欠です。

多様性とは、人種や国籍、性別、年齢、障害の有無、宗教、価値観など異なる特徴・特性を持つ人がともに存在することです。これらの違いを受け入れ、互いの個性を認め、生かし合おうとする姿勢が多様性の実現であるといえます。

そんな社会を目指し、活動している、「注文に時間がかかるカフェ」があります。このカフェは、接客の夢をもつ吃音症の子が接客を通して自信につなげるとともに、吃音に対して理解を深めてもらいたいという思いから始まった取り組みです。私がこの活動を知ったのは、ニュースの特集からで、テレビを真剣に見つめる、妹の横顔が忘れられなかったからです。

妹は小児期発症流暢症という吃音障害があります。流暢に言葉が話すことが難しく、言葉を繰り返したり、引き伸ばしたり、言葉が出て来ず、間が空いてしまったりすることがあります。吃音は、幼児期の話す機能がまだ十分でない時に発症することが多く、妹は言葉が出てこない時は、辛そうな表情をすることがありました。

妹の吃音は症状に波がある為、「普通に話せるじゃん」と吃音を軽く見られたり、誤解されることがあります。私自身も小学校に入学する前まで吃音症だったので、思うように話ができないもどかしさや、からかわれたり、笑われたりする痛みを知っています。

中学一年生の頃、学校で作文を書き、発表する授業がありました。その時、真っ先に吃音と向き合う妹の姿を書きたいと思いました。しかし、私がみんなの前で、わざわざ妹の障害について言う必要があるのか。普段から妹は吃音であることを気にしていないと言うけれど、本当だろうか。私は妹に聞くことさえできませんでした。

しかし、中学二年生の時、作文を発表する授業に向けて家で作文を書いていた時、「私も中学生になったら、吃音のことを書く。」

と、妹が言ったのです。その時、吃音と向き合い、話すことを恐れず、何事にも挑戦する妹をととても誇らしく思い、私も、妹のことを書きたいと思っていたことを話しました。

私は今から、妹の自慢をします。

妹は小さい頃から、自分で考えて、吃音と向き合ってきました。出にくい言葉の前に出てきやすい「お」をつけて話したり、英語を習い始めると、英語は言葉が出てきやすい魔法の言葉だと言って、覚えた単語で会話をしていたりしました。

小学校高学年になると放送委員長や行事などの代表挨拶も積極的に行っていました。

そんな妹が、小学校を卒業した日。家には手作りの小さな花束がメッセージと一緒に飾られていました。「いつも遊んでくれてありがとう。」その花束は、話すことが思う様に出来ない、一年生の男の子からでした。男の子に寄り添いたいという妹の優しい気持ちと、男の子

の想いが合わさった花束に、胸がいっぱいになりました。

そんな妹を近くで見てきて、感じたことがあります。

障害と向き合い、強く生きる人は、傷ついた分、人の痛みに敏感で、相手の気持ちに寄り添うことができます。理解し、受け入れる、強い心があります。そして、違うからこそ、互いに助け合い、認め合うことができます。多様性の課題の一つに、単に多種多様な人々が集まるだけでは、文化や価値観が違うことなどから、トラブルの原因になるという状況がありますが、こうした強い心は、多様性の課題の解決に近づけるものだと思います。

障害と向き合い、強く生きる人は、多様性の時代を生きる私達に大切なことを教えてくれる存在だと思います。

誰一人取り残さない。